第615号平成8年8月20日発行(毎月20日発行)
昭和49年8月31日第三種郵便物認可

山から失われる生き物たちのにぎわい
～生物多様性の視点から～

堂本暁子

内モンゴルのゴビ砂漠で植樹

日本の山は美しい。新緑に萌える春、太陽の日差しがまぶしい夏、紅葉が燃える秋、白く雪化粧する冬と、四季の変化に富んでいる。

山からの湧き水や雪解け水を集めた渓流が山を下り、川になって田畑を潤し、街を流れて海に注ぐ。

私は深い山奥の沢歩きが好きだった。北アルプスの黒部源流、朝日岳から真北に向かって流れる八久和川の源流、利根川源流、北海道は日高連峰の中央部から流れ出る札内川源流と、夏はもっぱら早い瀬やトロなど変化に富んだ渓流の景観と涼を楽しんだ。

以来わずか二十～三十年の間に、至るところで谷川の水が減りはじめ、清流がときには濁流となり、鉄砲水となって岸をみにくく削り、神秘的ですらあった渓流はその姿を変えつつある。多くの場合、直接の原因は森林の伐採、稜線を切り開く大規模林道工事、砂防ダムや護岸工事などによるものである。ヘリコプターから見ると、稜線に沿って開かれた大規模林道や砂防ダム、ゴルフ場、スキー場などが、まるで緑の山肌を刃物でえぐった傷のようで痛々しい。水が涸れるばかりではない。いつの間にか、鳥や獣たち、昆虫や高山植物も減ってきている。

山村に住むお年寄りたちは「昔は木の種類が多様だったので、秋になると紅葉で山が燃えるように色づいた。杉の植林が進んでから景色が単調になった。鳥の声も聞けないし、ウサギやキツネまでいなくなって淋しい」という。緑は繁っていても、山から植物や動物など、生物の多様性が失われている。

しかし、この状況は日本だけの問題ではなく、地球規模でも生物の多

1996年（平成8年）
8月号（No.615）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

山から失われる生き物たちのにぎわい…… 1
第38回有志閑談会…… 3
海外の山…… 4
報告
　第24回山岳史懇談会…… 5
　第20回若葉会山行…… 5
　探索山行…… 6
　丹水会・第30回例会…… 7
支部だより
　信濃支部　山形支部　岐阜支部
東西南北
　ニューデリーから海外委員会の皆様へ……10
　ウエストンの好物は……10
　第5回海外遠征・伊豆八丈島…10
　俳句・5月の劔岳……11
　俳句・かゝり藤……11
図書紹介　12
　『満ちてくる湖』『わが山路』『山おちこち』『安曇野』『最新雪崩学入門』『ヒマラヤ・アルパイン・スタイル』
山の切手・11……13
図書室受入報告……14
新入会員・住所変更……15
会務報告……16
会員異動・ルーム日誌……17
INFORMATION……18

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日　10～20時
水・金曜日　13～20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13～20時

様性は減少の一途をたどっている。ノーマン・マイヤーズはその著書『沈みゆく方舟』で、恐竜時代には約千年に一種、二十世紀前半は毎年約一種の割合で生物種は絶滅しているが、一九七五年頃には毎年千種が絶滅し、今世紀最後の二十五年間に百万種、平均して毎年四万種が絶滅すると推定している。その規模と速さは六千五百万年前に恐竜が絶滅した時よりもはるかに大きい。

こうしたなかで、一九九二年の「地球サミット」で生物種の絶滅をくい止めることを目的とした「生物多様性条約」が採択された。そもそも「生物多様性」は、従来の「自然保護」の考え方と違って、数だけを問題にする静的な概念ではない。刻一刻と

長野県栄村で

生まれ、育ち、動き、死ぬ生物は、相互に依存し、作用し合い、水や栄養の循環、土壌の生成、エネルギーの流れといった循環の機能を果たしている。つまり、生物多様性とは地球の表面を覆っている生態系の動的な機能、時間の経過、人間の生活や文化、さらに開発などの社会的要因をも視野に入れた、包括的な概念なのである。

わが国は一九九三年に条約を批准しているが、この条約は生物の「遺伝子」、「生物種」、さらに湿地、湖、森林、草原、海岸、海などの「生態系」の、三つのレベルで多様性を保全することを決めている。

問題は自然保護の法律があまりにも弱く、規制の効果がない点である。

例えば、大規模林道や高速道路、ダム建設のためには土地の強制収用の制度があるが、絶滅危惧種に指定されている動植物が生息していても、その地域を保護地区として強制的に指定するシステムはない。絶滅に瀕した生物種を保護する「種の保存法」にしても河川法や農地改良法、道路法など、開発を目的とする法律が優先するので、反対運動が盛り上がりを見せても、結局は工事が始められてしまうケースがほとんどである。その大規模林道やダムが住民の生活に必要不可決であるのならまだしも、なぜそこに路線を開くのか、なぜダムが必要なのか、納得のいかない例も少なくない。

例えば、山形県の朝日連峰の標高四〇〇メートルから一二〇〇メートルの稜線に沿って、森林開発公団が建設を進めている「大規模林道・真室川ー小国線」もそのひとつである。この路線は地質学的にも非常に危険が多いと指摘されている。しかも雪が多く半年は使えないのである。島根県の宍道湖と中海は、食糧が不足していた終戦直後に計画された干拓事業だった。ところが現在は減反政策がとられるほど、米の生産は過剰である。昭和三十年代に設計され、すでに時代遅れ、不必要になっているにもかかわらず、なぜ多額の公費を投入するのか、理解に苦しむ。しかも、今回干拓が予定されている本庄工区は、日本海から上がってくる魚の産卵場で、漁師にとってはかけがえのない水域だった。「工事のための工事」と反対の声があがっているのは当然である。

公共事業を中止しないのは、一度立案された建設計画は必ず実行に移すというのが、これまでの中央官庁の体質であったからにほかならない。今後、貴重な自然を守ためには、公共事業の見直し並びに中止を大胆に行うべきである。

太古の日本列島は森に覆われていた。ブナ林は世界でも類を見ないほど、風格があったという。ところが戦後、生産性の高い杉を植林するために、ブナ林が皆伐の対象とされ、各地で生物多様性の宝庫だったブナの森とそこに生きてきた動植物が姿を消した。

日本の美しい山々を次の世代に引き継ぐためには、生物多様性の視点から日本の自然を保全していくべきだと考える。そのために努力したい。

東京グリーンホテル　都内に3店舗654室
各種ご宴会,ご会合にご利用下さい

水道橋店●〒101 東京都千代田区三崎町1-1-16　TEL.03-3295-4161
御茶ノ水店●〒101 東京都千代田区神田淡路町2-6　TEL.03-3255-4161
後楽園店●〒112 東京都文京区後楽1-1-3　TEL.03-3816-4161

第三十八回有志閑談会
小石川後楽園・涵徳亭で開催

関塚貞亨

会員有志が語りあう恒例の有志閑談会が、六月十五日午後一時から小石川後楽園・涵徳亭で開かれた。世話役は昨年に続いて高田眞哉、武田満子の両会員、三十四人が出席、二時間以上にわたって清談した。

開宴にあたり山岳会誕生と同じ一九〇五年(明治三十八年)生まれ、今年九十一歳になる今井喜美子名誉会員の「来年も元気で、また会いましょう」という音頭で乾杯、自由歓談の後、武田満子会員の指名で七人のお話があった。要旨は次のとおり。

涵徳亭の庭園に集う34名の出席者

●木下是雄さんのお話

今年二月に行ったパタゴニアの話というご注文ですが、もうパタゴニアも珍しくないところです。ただ私が七十八、一番若いのが六十そこそこ、平均年齢が六十七歳、女が八人、男が六人というのは珍しい。

パタゴニアは四十年ぶりで、最初は一九五六年、日本の南極隊が初めて行った年です。「アメリカ隊の基地と観測設備、やり方を見てこい」といわれてアラスカ経由、数回の乗り継ぎと砕氷船乗り換えでプンタアレナスへ着きました。当時の人口は二万人、荒涼としたところでしたが、最近は人口十一万人で観光地化しているところもある。あの辺はパイネ国立公園と呼ばれ三千メートル前後の山々は険しく、メイジュとかエクランのような、結構手強い感じのパイネの塔とか角とか呼ばれている花崗岩の山がある。ガイドに聞くと『風が問題だ。岩は登れるが絶え間なく吹いている強風でザイルが擦れて細くなってしまう』という話でした。

●織内信彦さんのお話

いま膝を痛めておりまして、情けないことに杖をついています。その原因は山村(正光)さんの領域の蛭ヶ岳に十二〜三年前の一月に登ったとき、下りでぎっしりと枯れ葉が詰まっている道を滑るように下りて、そのときは何ともなかったのですが、東京に帰ってきてから痛くなり、その一週間後に乾徳山に登り、長い下りで決定的に痛めました。

その後は膝をだましだまし山歩きをしておりますが、必要があって調べたら、膝を痛めてから頂上を踏んだ山が七十座になりました。我ながら驚いています。

●佐々保雄さんのお話

映写機もスライドもなしで千島列島の話は難しい。千島は弧状列島でしかも島と島が並行するように配置され、雁行しています。(続いて、地質、植生などについて学問的なお話あり)

●佐々夫人のお話

主人は山に入ると、別人のように元気で明るくなります。戦前のことですが、私が主人と一緒に千島に行ったのは、炊事や荷担ぎをする女人夫として連れてってもらったのです。きれいな花がいっぱい咲いていたのが鮮やかに思い浮かびます。

●藤平正夫さんのお話

隣の渡辺兵力さんが「今西壽雄さんはなぜ山の文章を書かなかったのかを話せ」と言います。よく考えてみますと今西さんはアンナプルナのことは隊長としてほとんど書いています。またマナスルも登頂記を書いています。読みますと達意の文章で読みやすい。それでなぜ本を書かなかったかと考えてみたのですが、生真面目すぎたのではないかと思います。会報を整理するだけでも大変ですが、理事会のことを聞くとパッと出てくるんですよ。間違ったことは書きたくない、という、完璧すぎたんだと思います。

話題を変えて、これは奥さんから聞いた今西さんの亡くなる直前の話。麻酔の関係もあったと思いますが『ここはお国の何百里』という歌を何回も唄った、といいます。満州で現地召集を受け戦車隊を率いてソ連軍と戦い、部下も死んでいます。奥さんとお嬢さんは牡丹江近くの要塞の奥で軍の手違いで自爆させられ亡くなられたと聞いています。無念の想いが、あれだけ我慢強い人でも最後に噴き出したんだ、と思っています。(この後、立山付近の今年の状況のお話もあった)

●西丸震也さんのお話

帰ってきたばかりで、時差ぼけです。ニューギニアの話を、ということですが、食人種を探しに行きました。もうそんな人たちはいないよ、

といわれましたが、いやいるはずだ、と行きました。食人種というと野蛮人と思われがちですが、彼らは我々以上に文明人です。日本人も五千年前まで食人種で、首狩り族に変わったのです。台湾、ボルネオ、タイの奥地など首狩り族の系譜というのがあります。（その変化を解説）

食人種はいました。しばらく一緒に暮らしました。彼らの話をすると一晩中でも足りないほどですから、この辺でやめます。

●渡辺兵力さんのお話

山岳会の定款第二章第四条第四項に『自然保護活動の推進』とあります。このごろ一般には自然保護運動といいますが、山岳会は活動といっています。山へ登る者たちの自然保護をどのように考えるか、会報四月号（六一一号）に伊藤敞理事が書いている自然保護随想は「我が意を得たり」というべきで、近ごろは自然保護というと「保存、すなわち手をつけるな」「伐るな」ということが強調されすぎる。自然保護には「保存」のほかに「保全」「防護」「回復・改善」の道があるはずで、山の自然保護、とくに雪線以下について、自然保護委員会は科学委員会と共同して、日本山岳会独自の理論、方向を打ち出してほしい。年よりの愚痴として申し上げます。

海外の山

インド隊のチョモランマ遭難

江本嘉伸

先々月に書いた「エベレスト　悪夢の一日」の続き。

「救助を求めているインド隊員を助けなかった」と、福岡チョモランマ登山隊に対するインド隊の非難は、インド側を代表してインド・チベット国境警察（ＩＴＢＰ）が「福岡隊に落ち度はなかった」と認める公式見解を出して決着した。

ＩＴＢＰの顧問であるインド登山界の大物、Ｍ・Ｓ・コーリー大佐（一九六五年、エベレストに登頂したインド隊の隊長で、インド登山財団前総裁）が現場の状況を十分把握できないまま、福岡隊批判を急いだことが、事をこじれさせた。

コーリーの主張によると、彼は五月十三日付け、ＩＴＢＰ隊の隊長からのメッセージをもとに十四日、福岡隊を非難する声明を出した。

ＡＢＣに下りてきた福岡隊の二人の登頂者に、英国隊の一員として居合わせた登山家でもある記者、リチャード・カウパーがインタビューし、五月十八日付け「フィナンシャル・タイムズ」紙に「嵐のなかに置き去りにされ、死を待つ登山隊」の見出しの記事を書いた。福岡隊の立場を非難する内容だった。

コーリーは自分の主張の正しさが証明された、と考えたのだろう。五月二十日には、日本山岳会、日本山岳協会、そしてＨＥＴ（ヒマラヤ環境トラスト）のメンバーである田部井淳子あて、インド隊の三人を助けなかった福岡隊を非難する彼の主張を支持してくれるようＦＡＸを送っている。

妙な展開になったが、ともかくも日本山岳会は、村木会長名でインド隊の遭難を悼むとともに、「福岡隊とは、別な組織なので目下状況がつかめていない」という趣旨の、いわば〝あたりさわりのない〟回答を五月二十四日付けでした。のちに「日本山岳会は、インド隊クライマーの死を悼んでくれたが、福岡隊は何の哀悼の表明もない（「山と溪谷」誌に寄せた報告）」と、コーリーは述べた。田部井は「現場を知らない立場で非難などできない」と、〝黙殺〟した。

結局、福岡隊の英文の報告などによりインド隊が事実認識に誤解があったことを認め、コーリーはＩＴＢＰの顧問を辞任した。国際的な非難にさらされた福岡隊の名誉は回復された形となったが、この問題は、高所での「人道的行動」について考察する機会を与えた、という点では、無意味ではなかった。

筆者自身は、一九八二年、日本山岳協会の中国新疆側からのチョゴリ（Ｋ２）北稜隊を率いた、登攀隊長小西正継の考え方を思い出した。

無酸素、シェルパレス、全員登頂を目標に十人の登攀メンバーを選び、二次にわけて七人が登頂。うち一人が下降中、ビバークして体力を消耗した上、墜落死した。この遭難について当時小西は「全く個人の失敗である。勝負して負ければ死ぬ」と言い切ったのである。

今回の問題についても小西は「ヒマラヤの高峰の超高所における遭難で救助してくれなかった、というＩＴＢＰの非難は『甘ったれるな』のひとことですましていいと思っている」（「山と溪谷」七月号『８０００メートル峰と自己責任』）と、明快だ。

しかし、今日ヒマラヤ人のレベルはさまざまだ。また、非難は現場ではインド隊だけでなく、他のヨーロッパからの登山隊からも出たと聞くが、実は言葉の壁も重大な要素だったのではないか。そのあたりが「多国籍登山時代」のヒマラヤの難しさではないか、と思う。

REPORT　報告　REPORT

第二十四回山岳史懇談会

日大「桜門の山」を語る

図書委員会

二月二十三日㈮、日本山岳会集会室において、日大「桜門山岳会」の方々にお話しをうかがいました。

日大山岳部の創立は大正十三年か十四年、昨年の五月十一日、創部七十年を記念したエベレスト北東稜初登頂の快挙は、私たちの記憶にまだ新しいものです。

創部当初のハイキング程度から、昭和の初め、まだメンバーもそろわない頃は、他大学の合宿に個人参加して技術を磨き、次第に卓越した部員が養成されて冬の槍・穂高をも目指す部になっていきます。

昭和四年、関東学生登山連盟が結成され、加入。七年三月に部報第一号を発行。九年四月には富山県出身の部員の活躍を中心に、劔の池の谷の完登という記録も立てています。二年入部の初見一雄氏の薫陶を受けた富山出身の広田憲治、土肥信義、米沢直治の三氏、次に田辺正夫、神山勉、崎田熙、佐藤耕三氏と続いて部を牽引するリーダーが現れ、活性化していくのですが、戦時に入り、部活動も中断のやむなきに至ります。

懇談会には戦前から入部活躍した崎田氏（十六年卒）、村田顕氏（十九年卒）も出席され、直接体験された戦前戦中の貴重なお話をうかがうことができ、感激しました。

日大は他の大学と異なり、学部、学科が地域的に分散しており、山岳部としての部報も一号で終わっているのですが、戦前は各学部で「霧氷」「氷稜」「岳人」などの部内誌が刊行されていました。このように連絡や集会は大変だったのですが、それでも比較的よく集まっていたとのことでした。

戦中、御茶ノ水で集会中に特高に踏み込まれたこと、当時の厳しい世相から「生と死」について交わされた真剣な討議の内容、そして、十八年十一月にはついに休部となり、山道具も疎開させたそうです。

二十一年の五月、戦後初の合宿、二十二年春には松田雄一氏入部、また戦後の大ベストセラーとなった日本山岳会の「山日記」復刊は、神山氏が中心となって編集に当たり、日大の貢献が大だったようです。

日大山岳部の特徴は極地経験にあります。一九六四年のヒマラヤ入山禁止を受けて極地に転向、グリーンランド、北極点へと向かいます。先鞭をつけたのは宮原巍氏、このグリーンランドからも池田錦重氏をはじめ多くの人々が育っていきました。

ヒマラヤは、一九六二年ムクトヒマール、七〇年シタツツラ、七八年ヤルンカン、八一年と八六年ヒマルチュリ南西稜、九二年マカルー、そして九五年のエベレスト北東稜へと繋がっています。

日大の山岳部は戦前から雰囲気的にはリベラル、自由な雰囲気を持ったクラブといえるようです。OB会の会員数は現在二百四十五名、現役の山岳部員数も、他の大学と比較すると多いようですが、これは多分にOB会の面倒見のよさの表れではないかと思います。そして、この日の出席者も圧倒的に「桜門山岳会」の人々が多く、会のうらやましい雰囲気がうかがえました。（渡邉玉枝）

出席者も桜門山岳会の会員が多かった「山岳史懇談会」

第二十回若葉会山行

金城山・浅草岳

集会委員会

「山菜山行」に始まって二十回を数える今回は、申し込み時に「第二十回若葉会山行記念誌」が送付され、歴史と内容に理解と共感を深めた。

五月二十四日、夜の新宿をにわか雨の中、一路関越道へとバスは走る。上空の大気が不安定なようだ。「塩沢石打ＰＡ」で日の出を迎える。金城山から日は昇り、一瞬の光の大ページェントと山間の冷気に目覚める。雲洞庵センターで現地参加者と越後支部の方々と合流した。

金城山（一三六九メートル）は村から一気にそびえ、豪壮な印象を与える。かつては信仰登山が行われていたが、近年は登山コースの整備が進んでいる。

プランは登山と山菜探索及び雲洞庵拝観の別行動となり、六時出発。山案内人は越後支部・坂西会員。菅笠を頭に、腰には鉈を帯び、足元はゴム長と軽快な地元スタイル。当初、コースはA、B二つ用意されていたが、残雪が多いためB（雲洞・大月コース）のみとなる。

遅い春を迎えて、すべて草花が朝日に輝く村落を抜け、植林帯を登る。谷に沿って急な灌木帯に入ると、山桜が咲いている。四合目を過ぎ、新緑のブナ林に入ると急に残雪が増え、芽吹きが賑々しく、木洩れ日に萌黄色が新生の力に満ちている。六合目を過ぎ、シャクナゲの急坂を登ると尾根筋に出て、展望が開ける。巻機山が正面に大きく見えると間もなく頂上で、直下に巨岩を配した石仏が祀られていた。

鞍部の避難小屋は屋根を残して雪の下、全員（七十四名）の記念写真を撮り、下りは小屋から八合目に向けて雪面をカットして雪を愉しむ。下りのコースは尾根道で、途中から長い林道を、隣り部落の大月に下りる。バスは十六時頃雪洞を後にして宿舎へと向かう。国民宿舎浅草山荘は、浅草岳、守門岳の開けた谷間に破間川ダムを望み、豊富な温泉が楽しめる山奥の三階建て近代建築である。

今宵は第二十回の記念懇親会（約百名）が来賓の入広瀬村村長、越後支部長を迎えて盛大に行われる。中央には各種山菜料理がバイキング風に配置され、名物またたび酒、杏仁子酒、地元銘酒入広瀬などが並ぶ。

二十六日㈰、玄関前に五時全員集合、写真撮影。浅草岳登山と山菜採取の二組に分かれ、小型バスが登山組を登山口まで折り返し運ぶ。山は残雪が多く五月初旬の装い。記念すべき第一回「山菜山行」はこの浅草岳、山は変わらねど宿は立派になり、山容、趣もまた新たなり、と思われる。

林道は丈余の豪雪地帯に入り、除雪はとぎれ、雪山に隊列は入って行く。緩やかな登りの広い高原を展望休憩所に向かう。

たおやかな尾根に囲まれた高原台地がパッと開けて、気宇壮大。波打つ残雪がささやき、芽吹きがやかましい。朝の小鳥たちの音合わせは忙しく、時に大ゲラの大太鼓が興を添える。冬と初夏が同居する大自然の妙に感嘆。風薫る空気が甘い。

コースは歩きやすいルートが選ばれ、やすやすと十時には浅草岳（一五八六メートル）に着く（六十五名）。頂上に雪はなく、展望は全開。守門岳（一五三七メートル）が大きく、急な眼下に田子倉湖が光っている。春霞で遠景は夢のよう。

下りは速いが、展望台からあとの緩斜面は長くて遠い。宿では越後支部提供の山菜と豚汁、甘酒、銘酒が疲れをいやしてくれた。（三沢一三）

探索山行

ツキヌキソウと四阿山

科学委員会

平成八年度の科学委員会探索山行は、古代陸封植物の中で本州で唯一菅平だけに自生し、絶滅寸前の「ツキヌキソウ」の見学と四阿山登山を目的に、六月八〜九日、電気通信大学宇宙電波観測所を宿泊場所として実行された。

定刻に到着後、早速第一の予定地筑波大学菅平高原実験センターに向かう。センターでは筑波大学教授、同センター長・林一六氏の講義を受ける。まず「ツキヌキソウ」の自生する菅平付近の環境をスライドを使って解説される。

月間平均気温が北海道の稚内と同様であり、古代、この辺りにまだ人が住み着かない頃は、ブナ林でおおわれていたと考えられている。菅平の歴史は古く、人が住み着いて伐採や放牧、農耕を繰り返しているうちに、菅平の自然ができた。開発は現在も進められ、自然環境は悪い方向に変化している。

実験センター内では、菅平本来の自然林であるブナ林を復元しようと研究が続けられている。土地は一度裸地になると、まずシロザが生え、ヒメジョオン、ヨモギ、ススキを経て松が根付き、白樺林、ミズナラ林、そして最後にブナ林となるので、完全に復元するには百数十年かかると考えられているそうだ。

講義を受けた後、林教授の案内でセンター内のツキヌキソウ自生地及び樹木園を観察する。本年の多雪により、まだ三〇センチに伸びたところだが、はっきりと子葉の間から茎が突き抜けているのが分かる。

宇宙観測所内は芳野会員が案内してくださる。一〇〇メートルのシリンドリカルパラボナアンテナをはじめとして、一億分の一秒まで正確に測定できるルピジュウム周波数発生器などの諸設備を利用した、無人観測による太陽風や木星電磁波観測の実績などの話を聞く。

九日、明け方まで降っていた雨は今にも降り出しそうながら、出発時には幸いにも上がっていた。

四阿山では薄日も射して展望が開けた

朝の高原をバスで高原牧場まで行く。牧場の入り口で入場料一人二百円を払う。

大明神沢を渡り、三〇〇メートルほど行ったところから尾根道となる。標高一五五〇メートル。薄霞の中、芝の斜面に若葉をつけた白樺が美しい。視界はきかないが、昨日の講義を参考にしながら登行すれば、足どりも軽い。

一九〇〇メートルの小四阿山の下方で、白樺から岳樺に変わるのがはっきり分かる。ミヤマザクラが満開で、道の左右に咲き競い、お花見気分である。二〇〇〇メートルを越えれば灌木帯となり、長野県側の社がある。やせ尾根を一またぎすれば群馬県側の社に達する。三角点はさらに五分ほど行ったところにある。

頂上に着いた頃は薄日も射して根子岳も姿を現し、一瞬ではあったが妙高、戸隠の先に後立山の連峰が望めた。ゆっくりと昼食をとり、記念撮影をして出発。根子岳へ向かう下降路の急斜面のシラビソとコメツガ林の中は残雪が深く歩きにくい。鞍部からは笹原を一気に登り、岩場を越えれば根子岳へ着く。小休止後、霧の中を牧場事務所に向けて下る。途中ショウジョウバカマやアズマギクがたくさん咲いている。

梅雨のつかの間の晴天に感謝し、高原の二日間に満足して菅平を後にした。参加者二十六名。（**石田要久**）

丹水会第三十回例会

寄（やどろぎ）から櫓岳へ

丹水会は発足して今年で十六年目。JACの同好会として、この春正式に承認された。そして、同好会になって初めての例会となる第三十回の丹水会は、新緑が美しい寄の平成館を会場に、六月一日開催された。

今回は川崎精雄さんから、丹沢や相模野の古い話を伺う。川崎さんは地元綾瀬の出身とのことで、昔の大山街道や相模古社（十三社）にまつわる興味深い話を聞くことができた。夕食の前にゲストに話していただくようになってから、もう二十回を越す。丹沢に関するメンバーの知識もかなり向上している（……はずだ）。

続く宴会も、昨秋、会が厚木で開いた作品展の話題で盛り上がった。記念誌を出したり、会の法被を作ったり、活発な活動が丹水会の自慢だ。

翌日も朝から山行日和。恒例の記念撮影を終え、さあ出発。

今回の山行は二パーティーに分かれる。一つは寄から雨山峠へ登り、雨山、櫓岳と尾根づたいに歩き、秦野峠へ下るコース。もう一方は秦野峠から櫓岳を往復するコースである。

まず、雨山峠組約十名が出発。ちょっと早めの出発だ。峠の下まで車が入る秦野峠ピストン組三十名と、うまくいけば櫓岳の頂上でドッキング、昼食という趣向だ。途中、寄小屋の脇を通る。まだ丹水会のメンバーも少ない頃に、この小屋で会を開いたことがある。主人の大館三郎さんご自慢の猪鍋・鹿刺しが懐かしい。

雨山峠から櫓岳へのコースは行き交う登山者の姿もまれだが、ブナの明るい緑が目に鮮やかな気持ちのいいコースだ。ハンショウヅルが可憐な花をつけている。名前の由来が「半鐘」からきているとのこと。その釣鐘状の姿に一同納得。

櫓岳の頂上には両パーティーがほとんど同時に到着。これで全員そろっての記念撮影ができるというもの。何はともあれ、まずビール。それにしても、山で飲むビールはどうしてこんなに美味しいのだろう。あっちこっちからご馳走のお相伴にあずかった上に、食後は恒例、Fさんのコーヒー。あー極楽！

下りは全員そろって秦野峠へ、正面には丹沢湖が空を映す。眼下には秦野の町が広がる。大声で歌でも歌いたくなるような気持ちのいい午後だった。（**三好まき子**）

明日を築き業界をリードする
コンクリート製品の総合メーカー
前田製管株式会社
本社／酒田市上本町６－７
☎（0234）23－5111

JAC 支部だより

全国各地の支部から，独自の活動状況をリポートします。

信濃支部

第五十回ウエストン祭 関係者に感謝状を贈呈

六月二日晴天、梓川対岸に霞沢岳、六百山を臨むウエストン広場で、第五十回ウエストン祭が行われた。昭和二十二年、わずか数人での祭に端を発し、本年でちょうど五十回。八百余人の山を愛する人々が会場を埋めつくした今日の有様を、当時の人はだれが予想したであろうか。

祭は、田中信濃支部長の挨拶で始まり、地元安曇村小学校生徒の献花、エーデルワイスクラブの女性たちによるウエストンへの献歌、そして安曇村小学生の歌と進んでいく。毎年ながら、これらがないとウエストン祭にならないような気がするから不思議なものだ。

ウエストン師を偲び、登山の安全を願って黙禱を捧げた後、今年も徳本峠を越えて上高地入りされた村木会長の挨拶、来賓の有馬村長の挨拶と続いた。

第二部は、水野日本山岳会理事の記念講演。ウエストンがいかにして日本アルプスを世界に紹介したかという内容で、実に興味あるものであった。

この講演に先立って報告された前日の記念山行は、例年の徳本峠越えのほか、中尾峠コースと東天井、二俣・槍沢経由の二コースであった。これはウエストンが上高地に入山した三つのコースを再現しようという趣旨から企画されたもの。ウエストンは前後八回上高地に入山しているが、徳本峠越え五回、中尾峠越え二回、後は東天井コースであった。

第五十回を記念してその二ルートを加えたのである。残雪が例年になく多い本年、とくに東天井ルートには信濃支部の精鋭八人が挑戦し、道なき道を闊歩。無事入山したのはいうまでもない。

ウエストン祭終了後、五千尺ホテルで開催された午餐会では、五十周年を記念してウエストン祭にご協力いただいている関係官庁、協賛団体（二十団体）に村木会長より感謝状を贈呈し、日本山岳会の感謝の意を表した。

五十年間、一度も中断することなく脈々と続けてこられたウエストン祭。先人の地味な努力と奉仕。五十一回の祭に思いを馳せ、穂高の山々に後ろ髪を引かれながら車中の人となった。

（武田武人）

山形支部

六月例会山行・長井葉山で神事を体験!!

十二日間のヒマラヤ・トレッキングを終えて、久々の支部山行である。六月八日朝、山形市の県工業センターに集合。曇り日であったが、雲は高くまずまずの天気であった。

白兎登山口の、葉山参道の石碑を右に見て杉林の中の急坂に取りつき、残雪を踏んで葉山神社に登り着いた。

葉山神社で思いがけず、長井市のフォークソング・グループ〝影法師〟の一行と一緒になった。彼らは葉山神社に田植えが無事終わった報告と、秋の収穫祈願の神事を行うために登ってきたのであった。神事はお神酒「影法師」と稲苗を供えてお祓いをし、お神酒のお下がりをいただいてから、神社の奥の池塘を神の田代になぞらえて田植えをするというものである。私たちもこの神事に参加させてもらい、葉山信仰を体験することができた。

葉山を下山して小国町に移動。〝小国健康の森〟交流センターに宿泊。夜は会員の懇談交流で大いに盛り上がった。

翌九日は出戸の「るぷれ」を訪問。五味沢から荒川沿いに、大朝日岳登山口の吊り橋近くまで散策した。歩道に散生するブナの稚樹は、昨夜の夕食に出たブナの実生のてんぷらの味を思い出させた。

葉山神社では田植えなど、神事を体験した

金目という集落の名物「金目そば」を腹一杯に賞味した。金目そばは大朝日岳、祝瓶山登山の折には立ち寄って賞味されることをお奨めする。お土産のワラビを小脇に抱えて帰路についた。

（高橋　治）

岐阜支部

支部総会と六十八名の寺地山登山

六月一、二日に奥飛騨・神岡町の夕焼け色の宿「宗五郎」で、平成八年度岐阜支部総会と寺地山登山を、会員五十五人が参加して開催した。

68人が登った寺地山頂上

はじめに、高木碕男支部長から、「昨年度は、日本山岳会創立九十周年記念式典を、岐阜・京都支部合同で開催することができた。百周年に向けて今年はその初年度である。支部活動の充実と発展を図るとともに、私たちの後輩へ自然のままの山を残し、よい山登りを伝えたい。また、七月には中華民国山岳協会訪日友好登山が計画され、四十人が来日し、槍・穂高岳など親善登山をされる予定である。その後、とくに当支部会員がお世話になった八名の方々を招いて、乗鞍岳へ案内し、両国の親善を深めたい」と挨拶があった。そして、平成八年度事業計画など七議案を原案どおり承認し、総会を終えた。

続いて懇親会に入り、杯を酌み交わしながら、夜遅くまで山の話などにくつろいだ。

明日登ろうとする寺地山は、神岡町から北アルプス北ノ俣岳へ登る途中にある標高一九九六メートルの山で、今年の西暦年号と同じ標高である。また、今年の干支と同じ大鼠山が近くにあって、町ではPRに力を入れている。そして登山口である通称「山之村」は、人の訪れることの少ない、静かなたたずまいの奥深い山里である。この山里はその昔からいつとはなく、自然と人間が共生してきた「マタギの里」、「杣の里」として知られてきた。神岡町からこうした案内もあって、雪解けを待って六月の総会となった。

六月二日午前七時に「宗五郎」を自家用車に分乗して出発した。

上宝村の双六谷から飛越大規模林道へ入った。山の木々が芽生え、新緑が鮮やかに映えて、すがすがしい朝の林道を走る。山吹峠を越え、飛越トンネル手前の登山口（富山県境標高約一四六〇メートル）で下車し、当日参加会員と合流。総数六十八名の大所帯が神岡町役場職員・中野正一さんの案内で、八時四十五分飛越新道を登る。

今日の天気は、南海上に梅雨前線が横たわっているものの、関東沖にある高気圧の勢力が強く中部地方までおおって、飛騨地方は晴れ時々曇りの予報である。

予報通り快晴の天気に恵まれて気分は爽快。やや急斜面の新道を三十分も登ると県境の尾根に出た。尾根すじの雪解けにはミツバオウレン、ショウジョウバカマ、ツバメオモトなどが可憐に咲いていた。そして、遠くにカッコウが、近くでウグイスが鳴いていた。登り始めて約一時間、一六四三メートル辺りからは、コメツガ、ネズコ、シラビソ、トウヒ、ところどころにダケカンバ、シラカンバなどを交えた樹林帯となる。残雪も次第に多くなるなか、両サイドの景色も楽しみながら残雪の春山を堪能して登った。

十一時四十五分、全員が寺地山頂上へたどり着いた。

頂上は、深さ一メートル以上の雪に全面おおわれていた。東には薬師岳、北ノ俣岳、北には剱岳、立山などと四方の景色を望むことができた。高木泰夫会員の音頭で「ヤッホー」を唱和し、登頂の喜びを称えあった。

午後一時下山にかかり、三時に登山口へ無事帰着、散会した。

（清水芳彦）

トレッキングのパイオニア
アルパインツアー
［世界の山旅・辺境の旅］
世界の山旅・辺境の旅をご案内して今年で創業27年を迎えました。国内の山旅やアルプスのハイキングからヒマラヤのトレッキングまで。世界の山旅のことなら、どんな事でもお問い合わせください。
運輸大臣登録旅行業第490号／日本旅行業協会正会員 IATA公認代理店
アルパインツアーサービス株式会社
本社:〒105 港区新橋2-13-8 新橋東和ビル5階 TEL 03-3503-1911
大阪/ 06-444-3033　名古屋/052-581-3211　福岡/092-715-1557
仙台/022-265-4611　広　島/082-542-1660　札幌/011-711-7106
(りんゆう観光)

東西南北

ニューデリーから海外委員会の皆様へ

梶　正彦

本年一月、転勤でニューデリーにきました。一九六九年学生部パンジャブ登山隊、一九七六年ナンダデビ縦走隊の時に、しばらく滞在した懐かしい街です。

今日のインドは、経済開放の真っ直中にあり、大きく変わりつつあります。デリーは、今や世界三大空気汚染都市だそうです。街中車であふれています。

デリーに着いてから五か月、家の設営は例のインドペースでえらく時間がかかりましたが、やっと落ち着いてきたところです。インドの山仲間たちにはえらく世話になっています。彼らの手助けなしには、設営はもっと大変だったでしょう。

インド登山財団には、先日挨拶に行きました。事務局の面々もすっかり顔ぶれが変わり、過ぎた年月の長さを知りました。他の山関係の人たちにも、おいおい会っていくつもりです。

インド赴任中には、周辺を歩き回ってみるつもりです。ザンスカール、アルナチャル、プラデシュ、アンダマン、ニコバルあたりは面白そうです。デリーからですと、ラホール、スピティ、ガンゴトリ、ガルワール、クマオンの山々は比較的簡単にアプローチできます。トレッキングのフィールドには事欠かないでしょう。

インド・ヒマラヤは、ネパール、パキスタン、中国に比べあまり人気はありませんが、ぜひ機会をつくってお越しください。

一九九六年六月

ウエストンの好物は

田畑真一

ウエストンの大好物はココアだった。例えば明治二十七年七月二十一日付けの日記には「体温もほぼ平熱になった。卵を食べる気にならず、ご飯とココアをとった」（三井嘉雄訳『日本アルプス登攀日記』）とある。日記にはさらに八月九日、大正元年八月二十一日、大正二年八月十九日と散見する。とくに大正三年八月二十一日付けなど「一九一二年に奮闘して槍ヶ岳の『新しい登攀』をしたあと、下山の途中この辺りで（田畑注・槍沢）、三時ころ、ほっとしてココアを作った覚えがある」とある。二年前のことを鮮やかに記憶しており、ココアへの思いが強かったことがよくわかる。さらに同年八月二十八日にもココアである。

試みに著書のなかから拾い出すと『日本アルプス―登山と探検』からは五か所、『極東の遊歩場』からは二か所と散見する。

次なる好物は卵酒。これも随所に散見する。

以下、順不同で挙げていくと、チョコレート、カレー煮の鶏肉、米というよりもライス、パン。それに茶。緑茶である。以上で七種類になったはずである。ウエストンの好物ベスト7というわけである。ただし、私案である。

延べ十二年半ほどを日本で過ごしたウエストンである。以上のベスト7を見ていただいても和洋が入り交じる。今は昔、明治・大正時代においてである。私は「さもありなん」と、むしろ敬服するのである。

第五回海外遠征 伊豆・八丈島と小島

柳下棟生

なんとも大げさなる名称の集いであるが、この冗談ぽい会が発足したのが平成四年のことで、今回が五回目になる。当時集会委員会の担当理事の今は亡き入澤郁夫会員の提唱で集会委員の慰安会をしようということになった。山での集会の手伝いをした慰労に「今さら山でもあるまい、島にしませんか」との私の提案に皆さんご賛同なさって、まず第一回は伊豆諸島のひとつ三宅島に行くことになった。どなたか洒落て、海外遠征だといったことからこの名称が定着した。第一回から口コミで耳にして参加くださる人もいて、はなから集会委員会に関係する集いという性格は消えて、島山愛好家はどなたも歓迎している。

第一回から連隊旗として大きな幟を作り、JAC海外遠征と墨書してある。この幟を先頭に船の乗下船をしていて、最初のうち小恥ずかしい思いがあったが、今は堂々としたものである。JACと大書してあるのがみっともないとおっしゃる人もいらしたが、なにジャパン・アルツハイマー・クラブの略だとこれまた洒

俳句　五月の劔岳

勝田房治

残雪の壁なす玻璃やバス喘ぐ
攀づる背に暁紅凍る鹿島槍
雪壁の襞相寄りて尾根近し
雪脱いで日に浴しや劔岳
ピッケルに結ふ登頂の鯉幟
雪崩跡遠く数へて岩に立つ
ザイル身に残雪渓に乗り出だす

俳句　かゝり藤

北川蘇遊子

黒岳のいま万緑にかがやける
万緑や腹の底まで染まりゆく
踏みしめる歩々に愛しき山すみれ
高原の日と風に色かゝり藤
かゝり藤朝の山気に彩を研ぎ
天懸る藤の山田の面々に
風穴の涼気に無気味さを忘る
風穴の霊気に咲きて石楠花
山宿のラムネを冷す炭酸泉
万緑の山の精気を吸ひ登る
黒牛の散らばる山の牧五月
橋古びバス降り歩く山薄暑

（所属・山茶花）

落のめしている。

この洒落は現在ＪＡＣ内で流行している。毎回二、三十名の参加があるので、団体乗船として二等船室を占有し、持参の万国旗を飾って懇親宴会をすることを常としている。内地の夜行山行とはちがって、ゆったりとできるのがよい。三宅島につづいて、神津島、御蔵島、利島と大島と今年で五回目になる。島ではその最高所に登ることと温泉に入ることにしている。

さて今年は、男性二十名女性十一名の参加で、六月七日の夜から十日にかけて八丈島に行った。ルーチンは八日の八丈富士登山と現在島内唯一の温泉旅館である南国温泉ホテルに宿泊することである。朝上陸して車で七合目登山口まで上がり、皆思い思いに山頂を目指す。空は晴れている。飛行機が下界の空港に着陸するさまが見下ろせて面白い。外輪山の中は植生が豊かで池や小山がこれまた見下ろせる。頂上で旧集会委員長の川善市会員が挨拶され、一時解散して、各自南国温泉ホテルまで自由に行ってもらう。この島はいろいろ見所があるので、多くの人がタクシーで島内見物に向かった。ホテルの天然温泉で汗を流し、今は亡き入澤さんの追悼を中村太郎会員にしていただき夕食、二次会と寝床についたのが夜中の人も多々いた。

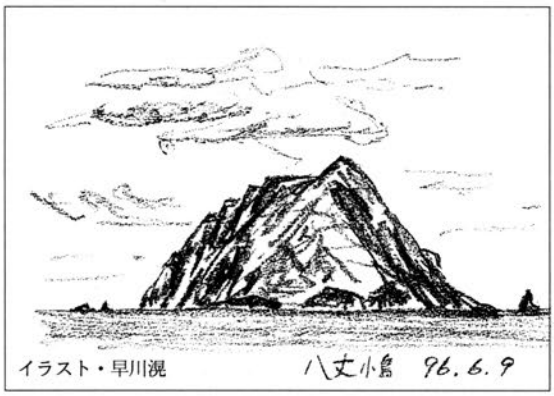
翌朝九日、現地解散。月曜日に仕事がある人は朝の船便で帰京しなくてはならない。

今日のオプションとして隣の八丈小島の大平山探検登山を計画した。この山羊しか住んでいない無人の島は海面から急峻な頭をもたげていて、見る角度によっては、東海のマッターホルンといっても過言ではない。大方の人がこれを目的に参加しているようで参加十九名であった。

瀬渡し船で鳥打に上陸する。登山情報はまったくなく、でたとこ勝負である。三十年前に無人島になったので、以来登山はなかったであろう。山羊の群れが一斉にこちらの様子を窺っている。昔人の住んでいた廃墟を通る。登山道状に見えるのは山羊道らしい。道を拾って、帰りのために赤布を点々とつけていく。山羊はものすごく急峻なところでも意に介さず進むようで、山羊道を進むと崖の際で行き詰まることもある。それでも長閑な草原状のところもあり、海から吹き上がってくる風が涼しい。天気も悪くなく視界もよい。背丈以上の竹藪を漕いだりして正味三時間十分で六一八メートルの三等三角点に全員登頂した。ここから特別な角度の八丈島を見る。夢中で証拠写真を撮る。皆満足して遅い昼食を食う。

帰路は流してきた三〇〇メートル程のテープを二区間伝って、全員迷子にならず、二時間十五分で帰還できた。帰りの瀬渡し船は小島の西側を走ったが、六〇〇メートルの山頂から急峻に海に落ち込む断崖の壁に点々と白く山羊がたむろしているのには驚いた。どのようにしてあの場所まで行くのであろうか。その夜は隣り合う民宿二軒に分宿した。

十日月曜日は一日かけて船で帰京したが、これもまた贅沢な一日であった。この旅の欠点は酒と懇親に度が過ぎることで、睡眠不足気味になる。毎年六月に催しているが、今後が島の選定などで正念場である。皆様の参加をお待ちしている。



イラスト・早川滉

図書紹介

カット　中村あや

細川呉港・著
『満ちてくる湖』

中国内蒙古の『さまよえる湖』にも似た草原の二つの湖「ホロンノール」と「バイルノール」は〝満ちてくる湖〟ではないかという仮説を立て、この実証に意欲を燃やしている著者のロマンあふれる著である。

ホロンノール湖は琵琶湖の三倍もある淡水湖である。この湖が実際に様々な要因で大きくなったり小さくなったりしていることを突き止めるために、出版社勤務の傍ら歴史資料、古地図調べ、さらにたびたび現地へ足を運んで実証するという、まことに現代の夢探検物語で、この方面に興味のある者にとっては羨ましい話である。

この仮説は、著者が内蒙古ホロンバイル草原を四輪駆動車で旅するうちにふと「草原の湿潤化に気づいた」ということからであるが、同じ仮説を立てながら、一度も現地を踏み得なかった老地理学者の、先達としての存在に筆がおよんでいるところにも、味わいを感じさせられる書である。

（細井澄子）

一九九五年十月　平河出版社発行
三二八ページ　二千三百六十九円

松崎中正・著
写真集『わが山路』
紀行集『山おちこち』

『わが山路』は著者が結婚以来、高校長を定年退職するまでに出かけた四百三十一回の山行を、同行者や日付、コースとともにつづった山行譜ともいえる写真集である。46判、総アート紙の白黒写真に限った編集は、山に対する思慕をよく現していてさわやかだ。とくに、山の四季、チュガチ山群、ライチョウ、樹などそれぞれ一ページ大のダブルトーン印刷による六四ページにわたる特集ページは圧巻である。暁闇の蝶ヶ岳頂上でたまたま出会った田淵行男氏への傾倒の程が感じられる。

『山おちこち』は高校の山岳部顧問として、部員やOBと出かけた冬山や沢登り、家族らと出かけたテント山行などの苦心談や失敗談がありのままに楽しく描かれた紀行集である。

これらはいずれも、山への限りない渇仰や強い絆、仲間や山村の人々との温かい心の交流の何よりの表明となっている。

（中村純二）

一九九六年三月　楽山斎発行　写真集・46判　一五八ページ　五千円　紀行集・B6判　二三〇ページ　二千五百円

穂苅貞雄・著
写真集「安曇野」
―アルプス山麓の四季―

槍ヶ岳の穂苅さんによる「梓川」に続いての写真集。安曇野の自然を余すところなくとらえた労作である。

春の訪れを告げるフクジュソウ、花陰に立つ道祖神、残雪の常念を背景にした菜の花畑や早苗田、浮き雲の下のソバ畑やコスモスの群落、棚田の秋、深紅のドウダン、黄金色のカラマツ林、そしてワサビ田に雪がくれば樹氷の季節、白銀のアルプスと梓川と白鳥――いずれも日本人の郷愁を満たす美しい「ふるさと」の姿である。

その安曇野に今、国営公園建設の計画がある。著者は前書でそのことに触れ、「私は安曇野の魅力はこの手つかずの自然そのものであると思っている。雄大な北アルプスを背景に繰り広げられる素朴な田園風景そのものが公園ではないだろうか」と言っている。この一冊は、まさにそのことを語りかけているようだ。

（蜂谷　緑）

一九九六年五月　山と溪谷社発行
七二ページ　二千六十円

北海道雪崩事故防止研究会・編
「最新雪崩学入門」
―雪山最大の危険から身を守るために―

本書の共同執筆者の一人が執筆半ばで雪崩事故で亡くなるという、衝撃的な現実のもとで完成した一冊である。雪崩はその予測が極めて困難であるとしているが、多くの体験と科学的な知識によって克服すべく、「…山から生きて還るべきなのだ」と結んでいる。

雪そのものの種類、雪崩のメカニズム、危険な行動、雪崩対策など図や膨大なデータとともに分析し解説している。雪に埋まった遭難者のレスキューに関する部分では、より具体的に解説、低体温症の様子など細かく記述されており、研修を受けているようだ。また雪崩先進国として、スイスの国立「雪・雪崩研究所」を紹介、研究会が現地を訪ね、五段階の雪崩予報や人工雪崩、雪崩研修の体験などを紹介している。

巻末には北海道の山々をはじめ富

山の切手⑪　一相山之良

山岳会周年記念・II

1983年2月26日ユーゴスラビア発行。スロベニア山岳会設立90周年記念。

オーストリア山岳クラブは、一八七八年設立され、一八八〇年オーストリアの最高峰グロースグロックナーに避難小屋を建てた。エルツヘルツォーク・ヨハン(ヨハン大公)ヒュッテである。創立百周年の記念切手には、グロースグロックナーを目指す登山者と、開設時の小屋が描かれている。現在の小屋は、二百五十人が宿泊できる立派なものだ。オーストリアには、別に一八六二年設立のオーストリア山岳会があるが、切手はない。

ユーゴスラビア(現スロベニア)山岳会は、一九九三年に百周年を迎え、スロベニアから記念切手が発行された。ユリウス・クギーの活躍により、「クギーの王国」と呼ばれたユーリッシェ・アルペンを背景に、五人のパイオニアを描く。一九八三年の九十周年にも、ヤロベク山とエーデルワイス、会章をあしらった切手が、旧ユーゴから出ている。スロベニアには、一八七四年に設立された登山者協会があり、百周年の記念切手が発行されている。

チェコスロバキアで連邦を構成したスロバキア共和国には、スロバク山岳会がある。一九二一年設立され、五十周年の記念切手が旧チェコから発行された。ビソケ・タトリ山群にある鋭峰、マールイガンクにピッケル、ハンマー、ハーケン、エーデルワイスを描く。

ブルガリア山岳会は、一九七九年に設立五十周年を迎え、クライマーを描く切手が発行された。ブルガリアの中央に、東西に延びる全長五五〇キロのスタラ・プラニ山脈が走り、そのところどころに塔のような岩壁があって、クライミングが盛んだという。

なお、他にポーランド山岳ガイド組合百年、ノルウェー山岳旅行協会百年、国際山岳連盟五十年、インド登山財団十五年、同二十五年などの記念切手がある。

切手右から
1971年4月27日チェコスロバキア発行。スロバク山岳会設立50周年記念。
1979年8月28日ブルガリア発行。ブルガリア山岳会設立50周年記念。
1978年12月6日オーストリア発行。オーストリア山岳クラブ設立100周年記念。
1993年2月27日スロベニア発行。スロベニア山岳会設立100周年記念。

士山や南・北アルプスなど、国内の主要山岳の雪崩発生分布地図と、近年の雪崩遭難事故一覧表があり、貴重である。雪崩に関する生きた教科書として一読されることをお薦めする。

(林栄二)

一九九六年三月　山と溪谷社発行
一五九ページ　千八百五十四円

アンディ・ファンショウ、スティーヴン・ヴェナブルズ・著
『ヒマラヤ・アルパイン・スタイル』

高峰登山の伝統的スタイルである大遠征隊の必要性を容認しつつ、そこにアルパイン・スタイルでの登攀を提唱している。そして限りなくアルパイン・スタイルに近い形での登攀記録を、カラコルム、ヒマラヤの両山脈から四十座をピックアップし、その登攀概要を記している。

各項目には登攀ルートをとらえた写真とそのルート図入りのイラストを掲載して解説しており、登攀の臨場感がより一層迫力をもって読む者に迫ってくる。各項目の末尾には、概要と登攀情報が記されており、手元に置いておきたい一冊である。

(飯田進)

一九九六年三月　山と溪谷社発行
一九二ページ　四千八百円

図書室受入報告（1995年5・6月）

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
田部井淳子	エプロンはずして夢の山	205pp/20cm	東京新聞出版局	1996	著者寄贈
石川富康	五十歳からのヒマラヤ：四つの八千メートル峰登頂	270pp/19cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
高橋佳晴	ヒマラヤ・ランタン花紀行	111pp/23cm	誠文堂新光社	1996	出版社寄贈
佐伯郁夫・他（編）	とやま山ガイド：10ジャンル100コース	261pp/21cm	シー・エー・ピー	1996	出版社寄贈
O.チェックランド	イザベラ・バード旅の生涯	306pp/20cm	日本経済評論社	1995	出版社寄贈
佐竹伸一	朝日連峰の四季（写真集）	115pp/21cm	無明舎出版	1996	出版社寄贈
青野恭典	上高地・槍・穂高：青野恭典写真集	147pp/29cm	日本カメラ社	1996	出版社寄贈
伊那山仲間（編）	焚（No.83）:創立20周年記念号	120pp/30cm	伊那山仲間	1996	発行者寄贈
井手孫六・他（監修）	信州百峠［改訂普及版］	227pp/26cm	郷土出版社	1995	出版社寄贈
地学団体研究会（編）	信州の地質めぐり：自然史ハイキング	265pp/19cm	郷土出版社	1995	出版社寄贈
中村周一郎	北アルプス開拓誌［改訂版］近代登山の基礎を築いた山の先駆者たち	275pp/19cm	郷土出版社	1995	出版社寄贈
西山秀夫（編）	続・ひと味違う名古屋からの山旅	221pp/19cm	七賢出版	1995	出版社寄贈
小出正一	マイカーで行く100低山ハイキング・東京周辺	159pp/22cm	主婦と生活社	1996	出版社寄贈
上野巌	山への想い（山日ライブラリー）	231pp/18cm	山梨日日新聞社出版局	1996	出版社寄贈
香月洋一郎	山に棲む：民俗誌序章	393pp/22cm	未来社	1996	出版社寄贈
瓜生卓造	檜原村紀聞：その風土と人間　(平凡社ライブラリーNo.130)	388pp/17cm	平凡社	1996	出版社寄贈
竹田津実	北海道動物記　(平凡社ライブラリーNo.132)	299pp/17cm	平凡社	1996	出版社寄贈
今西錦司	イワナとヤマメ:渓魚の生態と釣り　(平凡社ライブラリーNo.135)	329pp/17cm	平凡社	1996	出版社寄贈
武田久吉	尾瀬と鬼怒沼　(平凡社ライブラリーNo.138)	341pp/17cm	平凡社	1996	出版社寄贈
冠松次郎	黒部渓谷　(平凡社ライブラリーNo.145)	433pp/17cm	平凡社	1996	出版社寄贈
岩崎元郎	中高年のための登山学Q＆A（岩崎元郎の登山教室）	143pp/26cm	日本放送出版協会	1996	出版社寄贈
小西忠人	岩手の渓流・滝20選	88pp/19cm	岩手日報社	1995	出版社寄贈
高橋亭夫	焼石連峰の四季（写真集）	103pp/19cm	岩手日報社	1996	出版社寄贈
A.Fanshawe et al.	Himalaya Alpine-Style	192pp/29cm	Hodder & Stoughton	1995	パルテンバ・シェルパ氏寄贈
南会津山の会	岩代國若松縣第一大區全圖［復刻版］（南会津山の会創立30周年記念事業）		南会津山の会	1987	川崎精雄氏寄贈
薬品實	富士遠望：薬品實写真集	100pp/25cm	グラフィック社	1996	出版社寄贈
今村源吉	歩くスキー徹底ガイド：基本から楽しみ方まで	88pp/22cm	北海道新聞社出版局	1996	出版社寄贈
ブルーガイド国内版出版部(編)	関西周辺のキャンプ場オールガイド（ブルーガイドニッポンα305）	159pp/21cm	実業之日本社	1995	出版社寄贈
宮本袈裟雄　他	山と信仰：恐山	245pp/19cm	佼成出版社	1995	出版社寄贈
森正史	山と信仰：石鎚山	205pp/19cm	佼成出版社	1995	出版社寄贈
陳公余　他	聖地天台山：天台大師1400年大遠忌記念誌	253pp/21cm	佼成出版社	1996	出版社寄贈
菅原聰（編著）	森林：日本文化としての	303pp/22cm	地人書館	1996	出版社寄贈
日本山岳画協会（編）	日本山岳画協会創立60周年記念誌	90pp/26cm	日本山岳画協会	1996	発行者寄贈
辻田代史雄（編）	東京農業大学山岳部報告（第3号）：創立50周年記念	329pp/27cm	東京農業大学山岳部	1977	宮澤憲氏寄贈
白簇史朗	日本の名山・花彩彩：白簇史朗写真集	95pp/30cm	新日本出版社	1996	出版社寄贈
日本大学チョー・オユー登山隊(編)	チョー・オユー登山報告書1994年：日本大学チョー・オユー登山隊	45pp/30cm	日本大学エベレスト登山事務局	1994	発行者寄贈
地球の歩き方編集室	地球の歩き方:No.48パキスタン（1995−1996年版）［改訂第4版］	404pp/21cm	ダイヤモンド・ビッグ社	1995	出版社寄贈
地球の歩き方編集室	地球の歩き方:No.28ネパール（1996−1997年版）［改訂第7版］	336pp/21cm	ダイヤモンド・ビッグ社	1995	出版社寄贈
地球の歩き方編集室	地球の歩き方:No.44スイス（1996−1997年版）［改訂第7版］	369pp/21cm	ダイヤモンド・ビッグ社	1995	出版社寄贈
開成山岳部OB有志	想いで：永尾和夫さんと開成山岳部	100pp/22cm	開成山岳部OB有志	1996	発行者寄贈
B.ストーンハウス	北極・南極：極地の自然環境と人間の営み	213pp/30cm	朝倉書店	1996	出版社寄贈
牛丸工	上高地の常さん：山に生きた男の物語	197pp/19cm	信濃毎日新聞社	1996	出版社寄贈
北原一三	山の花旅	95pp/17cm	信濃毎日新聞社	1996	出版社寄贈
信濃毎日新聞社出版局(編)	信州の秘湯・名湯	207pp/22cm	信濃毎日新聞社	1996	出版社寄贈
信濃毎日新聞社出版局(編)	こころの山旅	286pp/22cm	信濃毎日新聞社	1996	出版社寄贈
市川健夫（監修）	空から見た信州の道（写真集）	253pp/38cm	信濃毎日新聞社	1994	出版社寄贈
YMSタートル倶楽部	シシャパンマ:Y.M.S.タートル倶楽部登山隊報告書　1995年秋	83pp/26cm	Y.M.S.タートル倶楽部	1996	発行者寄贈
山森欣一（編）	横断山脈ミニヤ・コンカ峰：登山と遭難の記録　1994	116pp/26cm	日本ヒマラヤ協会	1996	発行者寄贈
水越武	森への旅（サライ・ムック）	155pp/29cm	小学館	1996	出版社寄贈
野田知佑	南の川まで：こぎおろしエッセイ(cBe−Pal Books)	240pp/20cm	小学館	1996	出版社寄贈
創元社編集部（編）	関西ハイキングガイド130コース：1/25,000地形図利用のルートガイド	412pp/19cm	創元社	1996	出版社寄贈
竹内トキ子	富士山雲の変幻：竹内トキ子写真集	95pp/21cm	文一総合出版	1996	松沢節夫氏寄贈
辻まこと	山からの言葉（平凡社ライブラリーNo.151）	160pp/17cm	平凡社	1996	出版社寄贈
村口徳行（編）	MAKALU：雪豹クラブ・マカルー登山隊　1992	38pp/26cm	雪豹クラブ・マカルー登山隊	1993	発行者寄贈
柏瀬祐之	午後三時の山	234pp/20cm	白山書房	1996	出版社寄贈
森田秀巳　他	山の常識・非常識：山のマナーブック(Yama Books No.34)	433pp/17cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
日本放送協会（編）	中高年のための登山学：安心山歩きのすすめ(NHK趣味百科　1996.7−9)	160pp/26cm	日本放送出版協会	1996	出版社寄贈
本の出版社（編）	登山・ハイキング・バス時刻表（関東版・96年夏秋号）	415pp/18cm	書苑新社	1996	出版社寄贈
本の出版社（編）	登山・ハイキング・バス時刻表（近畿版・96年夏秋号）	319pp/18cm	書苑新社	1996	出版社寄贈

会務報告

六月理事会

日時　六月十三日　十八時三十五分～二十時

場所　日本山岳会会議室

［出席者］村木会長、中村、斎藤、宮下各副会長、吉永、中川、大谷、伊藤、南井、渡邊、溝口、山本、田邊、宇田川、熊崎、大蔵各理事、川崎、石橋各監事、小倉、大倉、村井、神崎各常任評議員

［委任］大屋、松浦、水野、堀井各理事、大森、重廣各常任評議員

議事に先立ちネパールのパルテンバ・シェルパ氏から挨拶があった。

【審議事項】

㈠　『山の先達・二人展』名義共催依頼の件　中川

槙有恒氏（仙台名誉市民）マナスル初登頂成功四十周年、山内ピッケルの山内東一郎氏（仙台市政功労者）の逝去三十周年忌にあたり、仙台の誇る『山の先達・二人展』（八月三十日～九月三十日）を企画、ＪＡＣ所蔵の「槙有恒氏の登山装備など」の借用と、名義共催依頼の要請が宮城県山岳連盟・仙台が誇る『山の先達・二人展』事務局よりなされた。　承認

㈡　ヒマラヤ保全協会一九九六年度理事会の件　中川

六月十三日午後開催、中川理事が出席。　承認

㈢　㈱自然公園美化財団評議員会の件　中川

六月十四日、東京プリンスホテルで開催、村木会長が出席。　承認

㈣　長谷川ＣＵＰ開催、名義後援依頼の件　中川

第四回日本山岳耐久レース（二十四時間以内）－長谷川ＣＵＰ十月十二日～十三日開催にあたり東京都山岳連盟より、名義後援の要請があった。　承認

㈤　福岡支部長交替の件　中川

四月十三日開催の支部総会において、支部長・副支部長が交替した。支部長・松本徑夫（会員№四六〇七）副支部長・深田泰三（会員№八一三六）　報告事項

㈥　ウエストンの写真借用要請の件　中川

平凡社編集部長よりＷ・ウエストン著・水野勉訳による平凡社ライブラリー版「日本アルプス再訪」の刊行を企画、その口絵にＪＡＣ所蔵の「河童橋のウエストン一行」の写真一点の借用要請があった。　承認

㈦　中華民国山岳協会訪日友好登山活動受入れの件　大谷

①七月十～十六日の予定で蔡禮樂会長以下四十名の来日が決定。海外連絡委員会で対応してきたが、主行動地が北アルプス槍・穂高岳、宿泊が山研希望なので、信濃支部の協力を得るための依頼にあたり、理事会の承認を受けたい。

②対応にあたる関係者の、上高地旅館組合に分宿の依頼手続きなどについても善処したい。

③七月十日日比谷松本楼での歓迎レセプションには、多くの役員・会員の出席をお願いしたい。

◎中華民国訪日団接待のために宮下副会長をチーフとして、小倉、神崎各常任評議員、大谷・溝口各理事、木村海外連絡委員の六名でプロジェクトチームを編成し、信濃支部及び関係委員会とで対応する。六月十六～十八日には神崎常任評議員が詳細打ち合わせのため訪中する。　承認

㈧　一九九六年年次晩餐会について　中川

十二月七日の予定で、会場は新高輪プリンスホテルで開催。イベントはマナスル登頂四十周年記念行事とする。　承認

㈨　ルーム夏休みの件　中川

本年はＫ２登山隊関連を考慮して八月十九～二十四日とする。　承認

㈩　「マナスルに立つ」フィルム借用願いの件　渡邊

七月十一日「夏山の夕べ」―講演（日下田実氏・マナスル登頂隊員）と映画上演のため、本会所有の一六㎜フィルム「マナスルに立つ」一九五六年毎日映画社製作の借用願いが栃木県山岳遭難防止対策協議会よりあった。　承認

【報告事項】

●全国支部懇談会の件　宮下副会長

五月二十五日、東海支部総会に出席、支部主催海外登山隊壮行会も併行して開催された。席上十月五～六日に東海支部主管で、全国支部懇談会が奥三河・鳳来町を中心として

①フォーラム（中高年登山の諸問題）

②懇親山行

③クライミングを楽しもう（青年部や若手の参加を求めて）

などの予定が発表された。

●Ｋ２登山隊一九九六の件　宇田川

・五月二十一日　ネパール先発隊

・五月二十三日　パキスタン先発隊

・五月三十一日　パキスタン本隊が予定通り出発。

・六月十三日現在、計画より一日遅れてＢ・Ｃを目指してキャラバン中。

◎留守本部対策の件

宇田川留守本部長以下十名で構成されているが、登山行動中の報告、マスコミ対策など有事の場合、午前中の対応などもあり得るので、登山

活動終了、イスラマバードに下山するまでの期間、ルームの鍵の借用をお願いしたい。　承認

【委員会報告】

●図書委員会　南井

①故今西錦司氏ご遺族、今西武奈太郎氏からコーカサスに関する図書（ドイツ語版）五冊寄贈された。

②第三回「古道を歩く」妻坂峠は一般参加五名を含め無事終了した。

●遭難対策委員会　熊崎

①七月十一〜十二日、岐阜県で行なわれる全国山岳遭難対策協議会（文部省・日本山岳協会・岐阜県教育委員会共催）に熊崎委員長が出席予定。

②六月八日に予定されていた日本山岳レスキュー協議会の総会は案件などの検討が不十分で、時期尚早との結論に達し、中止（延期）となった。

●山研運営委員会　溝口

①山研利用客数及び予約数の開始時中間報告

・四、五月＝百六十四名（会員七十九名、非会員八十五名）

・六月＝百六十名

・七月＝二百二十八名（台湾訪日団百六十名を含む）

・八月＝百十六名（自然学解説委員六十名を含む）

・九月＝五十名

・十月＝二十名

現在の予定数＝七百三十八名（昨年の実績数＝八百四十八名）

②台湾訪日団の山研運営委員の対応リーダー・坂本正智会員を中心に、本部・支部より山研運営委員が食事をはじめとする宿泊などの準備と作業を行なう予定。

●資料委員会　溝口

①資料委員会では、学芸員の吉田雅子会員を講師として、五か月間博物館学を学び、植村記念財団・植村冒険館勤務の学芸員内藤智子氏に助言者として参加していただいた。

内容1　博物館学の定義と基本理念
2　資料の収集
3　資料の分類
4　資料の登録
5　資料の取り扱い
6　資料の保存
7　資料の展示

以上、学んだことは、資料委員会に生かしていきたい。

②収納棚の製作　一〇四号室の談話室部分に、資料収納棚を作成した。主に、比較的大物の絵画、登山道具などを収納する。

●総務委員会　中川

一〇四号室の改装（じゅうたん、壁紙）を行う。

●集会委員会　中川

・五月二十五〜二十六日、第二十回若葉会山行、約百名参加。晴天の中二十五日㈯金城山に登る。二十六日浅草岳に登る。二十五日夜二十周年記念式典、入広瀬村村長・須佐氏参加。

・六月二十七日、若葉会写真交換会

・七月九日、カジタ・アイゼン、ピッケル講演会

・九月七日、ビールパーティーを二火会と共催、ルームにおいて開催の予定。

■会員異動

物故

須貝　高善（八五六四）　5・30
石川　治郎（七九七〇）　6・2
大澤伊三郎（一〇五九）　6・5
鳥居　寿興（九二三六）　6・10
柴田　雄二（一二〇八二）　6・16

退会

海老原道夫（六四〇一）　6・29
三代澤本寿（五四二八）　6・29
辻　寅吉（一〇四九八）　6・29
阿部　英美（一一六九五）　6・29
東山佐紀子（一〇三〇一）　6・29
泉有　輝信（七〇〇四）　6・29
池戸誠二郎（七五六〇）　6・29
宮前　淑子（九二二四）　6・29

終身会員

山本　陀介（四二六一）
小山　智（四三〇三）
冨沢　磐（四三二九）

改姓

中島朋子（一一七三〇）→有山

ルーム日誌

6月

3日　総務委員会
4日　フォトビデオクラブ　アルパインスケッチクラブ
5日　青年部　アルパインスキークラブ
6日　学生部　山の自然学研究会
　　青年部
10日　海外委員会　アルパインスキークラブ　図書委員会
11日　二火会　アルパインスケッチクラブ　95同期会
12日　常務理事会　ジャック93会
13日　理事会　集会委員会
14日　学生部
17日　総務委員会
18日　フォトビデオ委員会
19日　三水会
20日　学生部　緑爽会
21日　山研委員会
24日　資料委員会
25日　自然保護委員会
26日　科学委員会
27日　集会委員会
29日　山げらの会

6月来室者627名

INFORMATION

◆ビールパーティーへのお誘い

共催　集会委員会・二火会

恒例のビールパーティーを開催します。夏山の思い出話や報告を肴に、楽しい一宵をお過ごしください。

日時　九月七日(土)　十七時〜
場所　日本山岳会集会室
会費　二千五百円

◆第四回「山を語る」講演会

図書委員会

『雲の上の診療所』の著者・大森薫雄会員に診療所運営のあれこれから、今日の登山客が投げかける問題点などを語っていただきます。

日時　九月十三日(金)　十八時三十分
場所　日本山岳会集会室
テーマ『慈恵医大槍ヶ岳診療所の四十五年』
講師　大森薫雄会員

◆講演会のお知らせ

百年史委員会

日時　九月二十七日(金)　十八時三十分〜
場所　日本山岳会集会室
テーマ『近代登山初期における測量技師たちの活躍と功績
舘潔彦氏の活動を中心として』
講師　師橋辰夫・日本古地図学会会長

◆講演会のお知らせ

科学委員会

人間による人間にとっての地球環境の悪化が危惧されています。その中でも森林、とくに天然生広葉樹林は、とかく善玉と目されています。「昔はよかった、今は悪い」も一般的風潮です。森林生態系と環境要因との相互作用について、現在明らかになっている範囲をお話します。

日時　十月三日(木)　十八時三十分〜
場所　日本山岳会集会室
テーマ『環境と森林』
講師　岩坪五郎会員・京都大学大学院農学研究科森林生態学分野教授

◆きのこ山行

集会委員会

朝日連峰の一番北、山形県と新潟県の境近くに位置する三百名山の名峰摩耶山に登り、海辺の宿で山の幸と海の幸と温泉を楽しみます。

日時　十月十九日(土)〜二十日(日)
日程
十九日　摩耶山登山
二十日　名所めぐり
宿泊　国民宿舎「由良荘」
集合　現地＝十九日朝摩耶山登山口
東京＝十八日(金)二十二時三十分・新宿駅西口スバルビル前
会費　現地参加＝一万四千円（懇親会、写真代、保険料を含む）
バス代　一万五千円
申込　氏名、性別、会員番号、住所、年齢、バス乗車の有無を明記の上ハガキで集会委員会宛
締切　九月二十日必着　定員六十名
＊申込者には詳細案内を送付します。

◆岩登り研修会開催のお知らせ

指導委員会

アルパインクライミングにおける確保理論・確保技術の修得を目的とした研修会を開催します。

本研修会は文部省登山研修所の施設を使い、コンピューターと連動したロードセル等最新の機器を用いて登攀者が墜落した際の衝撃荷重を測定しながら、アルパインクライミングにおける最も効果的な確保技術を検討し、修得することを目指します。

大学山岳部で後輩を指導する立場の現役リーダー部員、監督・コーチ等指導者の方々に自分の確保技術・確保理論などを再確認するまたとない機会だと思います。ふるってご参加ください。

日時　十月十九日(土)〜二十日(日)
受付　十九日八時　登山研修所一階玄関
場所　文部省登山研修所　富山県中新川郡立山町千寿が原（富山地方鉄道立山駅徒歩五分）
費用　大学生　一万円（予定）
一般　二万円（予定）
（研修費・宿泊費・食事代を含む。保険料は除く。参加者は各自で傷害保険に加入のこと）
主たる研修内容（予定）
①確保器具の特性（制動確保と弾性確保を考える）
②制動確保の方法（ボディビレイと器具による確保を比較）

味の技、心でつくる
創作料理 むさし坊
むさし坊　日比谷店
（東宝ツインタワービル9F）
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905
むさし坊　麹町店
（有楽町線麹町駅際）
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさし坊　神田西口店
（神田西口通り商店街）
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友膳ゆうぜん
（半蔵門線半蔵門駅3分）
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891
むさし坊　番町店（日本TV通り五番町交差点角）
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

③アンカーのとり方（アンカーピンの種類と設置すべき位置）
④落下係数とランニングビレイのとり方
⑤懸垂下降時のロープセット
⑥岩登りにおける現場での救助技術（動滑車による墜落者の吊り上げ技術と宙吊り状態からの自己脱出技術）
⑦その他（屋内クライミングボードでのスポーツクライミング実習など）

講師　柳沢昭夫・文部省登山研修所専門職員
　　山本一夫・日本山岳ガイド連盟国際委員長
　　渡辺雄二・日本山岳会理事
　　熊崎和宏・日本山岳会理事
問合せ　指導委員会／担当・熊崎
＊詳細案内・申込用紙は日本山岳会指導委員会宛ファックスないしハガキでご連絡ください。
＊日本山岳会未加入の大学山岳部及び日本山岳会一般会員の方も参加できます。ただし、岩登り未経験者は参加をお断りする場合もあります。

◆伊吹山播隆祭

東海支部

昨年に引き続き播隆上人修行の地伊吹山山麓で第二回目の「伊吹山播隆祭」を開催します。

日時　十月二十六日(土)〜二十七日(日)
場所　伊吹山山麓一帯（岐阜県関ヶ原町および春日村）
日程
二十六日　十二時三十分「伊吹山荘」集合　十三時〜播隆上人足跡めぐり（修行の滝―岩窟―円通寺など約四時間の散策）
二十七日　十一時春日村笹又の阿弥陀堂にて仏事―上人開基の一心寺参拝―播隆鍋の供養膳
宿泊　伊吹山荘（関ヶ原町玉
TEL・〇五八四―四三―一五一五
費用　一万円（一泊三食）二十七日のみの参加者は食事代実費
申込・問合せ　稲葉省吾宛
〒五〇三―二三・岐阜県安八郡神戸町落合一二四―一一
TEL&FAX・〇五八四―二七―七二四七

◆写真展「ウエストンの見た明治・大正の日本」

W・ウエストンが収集した写真（一部は自身の撮影）九十四点の写真展。原板（ガラス板）は、めぐりめぐって現在、イタリア国立トリノ山岳博物館が所蔵しています。去る五月、ローマの日本文化会館で行われた写真展と同一内容。『日本アルプスの登山と探検』のウエストンではなく、その第三著作『A Wayfarer in Unfamiliar Japan』の民俗学的立場のウエストンの姿がうかがわれ、また明治、大正の風俗が見られる貴重な興味ある資料です。
日時　十月一日(火)〜十三日(日)（月曜休館）・入場無料
場所　愛知県豊田市・豊田市美術館
TEL・〇五六五―三四―六六一〇
主催　ウエストン展実行委員会
　　豊田市美術館
　　豊田市美術文化振興財団
共催　イタリア国立トリノ「ドゥーカ・デェリ・アブルッツィ」山岳博物館他
＊その他、記念講演、対談あり。

（大森久雄）

◆栗駒山に集合!!

ジャック93会

日時　九月二十八日(土)〜二十九日(日)
日程
二十八日　十時／一関発チャーターバスで須川温泉へ―栗駒山を経て「いこいの村栗駒」着十六時／懇親会
二十九日　朝食後解散
費用　一万円（宿泊、懇親会費、チャーターバス料金を含む）
申込　ジャック93会
問合せ　大場悠平宛
TEL・〇四六七―四六―〇五〇二
＊関東方面の方はJRウィークエンドフリー切符（一万五千円）がお得です。一関からの路線バスの接続はありません。チャーターバスをご利用ください。

◆92年度同期生山研に集合！

92年度同期会

いままで首都圏内の有志に連絡、ささやかながら三回の集会を重ねてきた92年同期会初の全国版集会です。（92年度とは93年三月末入会の会員番号一一三七一までの方と解釈しています）　ぜひご参加を!!
日時　十月十二日(土)〜十三日(日)
日程
十二日　十六時山研　十八時より夕食兼懇親会（持ち込み歓迎）
十三日　各自山行。
場所　上高地山岳研究所
費用　七千円（宿泊費及び懇親会費）
申込・問合せ　氏名、会員番号、住所、電話番号を明記してハガキまたはファックスで左記へ
高橋てる子（〒二四一　横浜市旭区今宿町二五四三―五三
TEL&FAX〇四五―九五一―四八九〇）

日本山岳会会報　山　615号
1996年（平成8年）8月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102
東京都千代田区四番町5−4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京（03)3261−4433
FAX 東京（03)3261−4441
発行者　村木潤次郎
編集人　伊藤　敞
印　刷　株式会社　双陽社